

水上勉

越前一乗谷

激動の世紀を  
見た――

谷崎賞受賞に輝く著者が雄渾に描く一國興亡のドラマ！

越前一乗谷

水上

勉

越前一乗谷

©一九七五  
検印廃止

昭和五十年十一月一日印刷  
昭和五十年十一月十日発行

著者 水上勉

発行者 高梨茂

印刷者 山田博

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一  
電話(美二)五九二二(代)  
振替 東京 一三三四番

越前一乗谷

裝  
幀  
•  
著  
者

福井にある朝倉家の菩提寺心月寺で義景の肖像画を見たことがある。絹本着色の一幅ながら、条幅仕立の表装生地はうす暗い場所でもあったので、花鳥刺繡織がしずんでみえ、平織りの絵絹も色あせていた。約七十糎の長さはあったかもしれない。義景はやや左向きの姿勢で、右手に白扇をもって黒鞆の脇差をさし、上畳に安坐していた。有髪僧形であった。白衣のうえに薄茶の法衣をつけ、掛けた朱褶の袈裟がひろく膝まで被い、衣紋のくまどり、衣のしわも奔放な筆はこびで、風貌また威厳にみちている。二重瞼の切れ長の眼、鼻筋も中高でまっすぐさがり、髭をたくわえ、いかにも毛なみのよい武将といった感じだが、気になるところが一ヶ所あった。細い眉がぴんと張っているせまい額から、うしろ鬚にいたる前頭部が、異様にひらべったいのだ。誇張していえば、そこに盃を二つならべても落ちないくらいひっこんだ頭をしている。高鼻で先が驚の嘴み<sup>くちばし</sup>たいにたれ、ひき結んだ口もとも見ようによつては、貴稟は感じられる。だが、前頭部か

ら頭部の中央にかけての淋しさはかくせなかった。戦国時の結髪というものは、多少はみなこのように、前頭からひきつめたように髪をうしろへ絞るがゆえ、そう見えたかもしれぬ。しかしどうみても義景のそれは尋常とは思えなかった。この人はひょっとしたら、神経質だったかもしれないぬ。またしょっちゅういらだっていたかもしれないぬ。何げない動作に、ちょっと眉をしかめてみせるような举措さえ偲ばれて、その骨相には云いかえてみれば、どこか薄幸な翳がさしているのだった。もっともこれは私の主観であって、見る人によっては顎の細まったところも貴族的だといえそうだが、私には物悲しい顔立ち一語につきた。もとより人の顔をみて、その心理を推察する楽しみは自由なる人情である。私たちは戦国に生きあわせなかったのだから、実人間に会った如き口はきけない。うす暗い本堂の格子戸からさしこむ夕方の光の中で、浮きたってみえた絹絵の肖像にでも、その人の吐く息を感じとるしか方法はないのであった。見る私の心が、義景の実像をかんだかもしれない。人間と人間が生きて向きあつて、その顔から心証を感じとるのだから、似たことはしばしばないとはいえぬ。

肖像画の上部に画賛があつた。字は特徴のある筆で、蛭へびのように這う一種の風格をもっていた。

有髮俗号<sup>ニ</sup>衣色僧<sup>ス</sup>

本来面目<sup>ニシテ</sup>俗<sup>ス</sup>非<sup>レ</sup>僧<sup>ス</sup>

此間<sup>ニ</sup>天下<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>ニ雅会<sup>ニ</sup>

隻履帰<sup>ル</sup>西<sup>ニ</sup>峽<sup>ノ</sup>齒<sup>ノ</sup>僧<sup>ノ</sup>

于豈天正元龍集癸酉仲秋念有日

心月住侶觀奚察拙書

じつはこの通りではない。左から右へ書かれていたので、いまの人には読みにくいと思い、勝手に私がうつし換えてみた。返り点も送り仮名もついでにふつてみたものだが、間違っているかもしれない。間違っているといえ、この偈も意ははっきりせぬ。龍集は星がやどるの意だろうから、年を意味し、天正元年仲秋の画賛であろうか。筆者は心月寺九世觀奚純察和尚である。これくらいのは想像がつく。しかし天正元年の秋なら、義景はこの年の八月に自害しているで、死んでもない賛といわねばならない。日もたたぬ死を偲んで、純察和尚が一筆ふったとみてよいが、禪家の偈ほどまた私にわかりにくいものはないのだった。註釈つきでさえ納得したい字句に会って戸惑ってきた。いまこの偈も手もとの辞書をひいてみるがさっぱりつかめぬ。識者にうかがいたいのだが、私ははじめ、「隻履帰西峽齒僧」をはなはだしく淋しい気持ちで読ん

でいる。「片はだして西へ歸る齒のかけた僧一人」と私はよんだ。しかし、「その僧は、俗にして僧にあらず」が本来の面目だというのである。西は彼岸浄土とするなら、義景の死、つまり自害の場に吹いていた悲壯酷薄の風は、この肖像画の上にも吹いている心地がしたわけである。浄土に向って、片はだしの旅立ちとは異形といわねばならぬ。左様。純察和尚に聞いてみたい。義景は死んで浄土などへいったものだろうか。そのあかしを教えてほしいのだ。いつわりのない感慨はそれであつた。

## 二

朝倉義景に死の影が人しれずつきまといはじめたのは、いったいつ頃だったろうか。厳密に云えば、死の影は、その人の生誕にしのびよっているといえる。が、それはしかし、戦国に生きた者なら誰もがそうだったはずで、ここではある運命の狂いが生じた時期といった意味にとつてほしい。その年まわりを義景の生に見つけるとすれば、三十四歳。永禄九年の秋ではなかったかと思う。一乗谷の朝倉館へ、細川藤孝が初めてきた日である。義景は細川を書院に通じて会見したが、会う前から用件はわかつていた。奈良一乗院を出て、近江矢島野にいたはずの足利義秋が、覚慶という僧名を捨てて將軍位を継ぐと云いだし、若狭後瀬の武田孫八郎に身を寄せていて、直

筆の手紙は、矢島野御所からのをあわせれば都合四通ばかりうけとっている。文章はみな切迫した義秋の、感情のたかぶりをそのままあらわしていた。兄義輝の非業の死以後、京を占拠した三好、松永らは、阿波の義栄を奉じて將軍繼位の挙に出ている、直系である弟の矢島野での還俗、將軍位繼位の宣言を黙殺するのみか、六角と共謀して命をねらいさえした、しかたなく若狭の武田へ逃げてきたが、ここは孫八郎めに力はなく、血族のいがみあいでは収拾もつかぬ騒動だ。かねてよりの計画だが、織田か、上杉か、甲斐武田に頼りたいと思う。しかしこの三者は誰もが、義秋將軍就任には賛成してくれるが、まだ援助の時期ではないと、入洛の約束はしてくれない。そこで、考えたことは、越前朝倉なら、先に義輝の仲立ちもあつて、加賀一揆との間が平穩裡に和睦できたことでもあり、いまのうちなら兵を京へさしむけられよう。動座の意志固いものがある。よろしく迎えてくれるよう、細川をさしむけるから返事をもたせよ、と書かれてあつた。氣になつていたところへその細川が顔を見せたのである。義景は廊下を歩いてゐた。複雑な氣持だつた。とにかく会見してみよう。むかしといつても、義輝健在時代に大叔父宗滴につれられて、花の御所室町の館へ伺候したことがある。その時、義景は、まだ若かつたが、義輝から「義」の一字をもらつて、改名した。藤孝は管領職の子で、当日はやはりその一座にいた。初対面ではなかつた。義景が書院にきて坐ると、藤孝は、

「美濃の明智十兵衛殿が来なかつたか」

ときいた。

「一ど会い申した。公方さまのことを心配して、こちらへ動座願うようにとしきりにいつて帰った」

美濃から漫然とやってきた十兵衛は、信長が井ノ口で長井に手古ずっている様子を話すのが主であった。公方動座のすすめも、その信長を意識してのことで、越前入りはひと先ずひきうけた方が得策だと云いはしたが、真意はどこにあったか。足もとをすくうようなこの男の鋭い眼つきは、刃物のような感じで、義景のあまり好むところではなかった。城をとられて、ゆくあてのない浮浪男が、眼だけぎらつかせ、先を読んだようなことを売り物にして歩いている。多少どころでなく不快であった。早々に帰ってもらったのだが、細川が先ずその十兵衛のことをきくので、気になった。

「どこへいったか知らぬが、ふた月ばかり城戸の外の阿波賀の屋敷をあたえておいた。先ごろ京へ向うといつて出た。が、このごろは顔はみせぬ」

という、細川は、首をかしげて、

「聡明な男だ。公方さまもみとめておられる。取りたててやってくれ」

という。そのあとで、細川は、使いの本題に入った。いうことは義秋の手紙の内容とかわらなかった。こたえは出来ていた。かすかに厄介だな、という気はする。その厄介だなと思ひ氣持は

そうはつきりあるわけではない。が、いつわりなくいえば、もう少し考えたい気持であつた。なるほど十兵衛も極力公方を迎え入れよといったし、信長のことだ、やがて岐阜を攻略して京都進出をはかるだろう。その時は、公方を名分にたてての上京だ。眼にみえている。十兵衛はそこともいった。朝倉にもし、信長に先んじて京都入りしたい考えがあるなら、好機だと十兵衛は力説したのだ。しかし、義景は重い気持できいている。

「われらには、加賀一揆にかまえての兵力が要ります。上京は時期を得ない」

十兵衛にいったと同じことを細川にもいった。

「しかし、とつくに和睦はしたのであるうが」

細川はことばをかえした。

「したことはした。が、貴殿らには、一揆の本心はまだつかめておらぬ。根ぶかいのだ百姓めらは。加賀一國をいまに、制圧しよう。和睦したからというて、向うは砦いだ鎌を捨てるとは約束しておらぬ。こっちが兵をひけば、またぞろ出張ってくるのは眼にみえておる。しぶとい。われらは三十年、やつめらと戦つてきた。その歳月で血が九頭龍の土にしみた。芋、大根にさえ血が匂う。貴殿らが考えるように、やつらがやすやすとひきさがるはずはない。というて、貴殿をいま猫のつかいで帰すつもりはない。われらは、將軍家には、恩義がある。上京の時期ではないことをこつた上で、快くご動座だけは迎えたい。いつでもかまわぬ。公方さまの意の向く日に

参らるるがよい。われらは城をあけて歓待しよう」

義景は、考えていたことをすべて云ってしまったと気が楽になった。吐息が一つ出たほどだった。細川の顔にもかすかに血がのぼった。細川は大きくうなずいて帰った。玄関でみた細川のその背なかに、動座のつきは、何としても、上京させてみせるぞという決意のようなものがほの見える。しかし、それは義景にかすかな不安の影をしのばせている。明智十兵衛の去る時にも感じたものであった。

よそから吹いてくる風——がどうしてこう漠然と血の匂いをふくんでいるのだろう。十兵衛の顔にも、細川の顔にもじつは疑念をおおるようなけはいはなかったと思う。二人は必死に將軍家のことを思い、熱情的でさえあった。義景にはない旅人の恬淡さと、羨しいほどの若々しさもあった。それは眼にも口にもあふれているように思えた。だがそのふたりの生々した顔にも背なかにも血が匂っていたのはなぜだろう。こんな感慨は、じつは、この数日以来から、義景の心にさしている鬱のせいなのだが、その因は何であるか当人にはわからない。自分をつきつめて考えてゆく性格ではなかった。凡庸に物事をうけとって、しかも凡庸にそれをくぐりぬけてゆく。そういった生き方を身につけていた義景には、ある一つのことを考えつめる才覚に乏しいものがあつた。細川へいったように、和睦はしたもの、いつまた切りかえしてくるかわからぬ一揆の音を北辺九頭龍の岸べにききながら、一方では、岐阜井ノ口の動静もちろん、隣国小谷の浅井の動きに

まで氣を配る日常だ。それが氣鬱の因である。いま館の高窓から、屋根だけが見える向い山裾の盛源寺には、富田の若者を屯ろさせている。毎日のように若者は山をこえていた。報告には、一日おきに妻の乳人ちゅうとである福岡石見が伝えにきてくれるが、それをきくさへ鬱陶しい。このけだるさの根はどこからくるのだろう。義景はただ眉をしかめるだけで、頭の鈍痛はなおらない。

### 三

一乗谷の秋は、館のうしろの城山の肌から染まって色変えしている。いつみてもみごとに木々の葉の変わりようであった。日に日に変わるそれは、義景にとつては、もっとも身近に心をなぐさめてくれるもののように思われる。城山は頂上の方へゆくほどに樅の大本が繁茂している。その下に樺、楠、栗、櫟などの巨大な雑木が枝を張っていて、色を変えてくるのは、先ずこれらの木々だった。最初に色づくのは、うるしだが、これは、のっけから真紅に色づいて毒々しいのであまり好まぬ。それより淡い黄味がかった青から、次第に橙色にかわって、十月半ばには、急に紅に染まる楓、栲どもの変容は見あきないのだった。このけしきを見るのは、裏庭につきだした奥の書院からだ、いつもなら紅葉をめぐる日は妻子、母もよんで酒宴を張るのに、ことしは気がすすまぬ。自然の変容は心にしみても、人事のわずらわしさにはうとましくて神経にささるのは如

何ともしがたい。孤独にその日は飯をすませ、まだ陽の残った城山の峯がうつすらと橙色の絵具をちらしたようにみえるのをぼんやり眺めていた。裾の杉林から安養寺の椎の森へ夕靄が這いあがる。頂上を被っていた乳色の狭霧が山の中腹の紅葉をうす絹でつつむようにせばめてゆく。義景はそれに見惚れていて、急に、その紅色の靄にうかぶ宗滴の死にぎわの顔を見てうろたえたのである。

「義景よ、加賀だけはやつつけねばならぬぞ。息の根をとめておかねば、朝倉百年の土台がゆらぐ日がくるぞ。上杉も北から攻めるというてきた。こんどこそはさみ打ちじゃ。何としても、やつらを皆殺しにせねばならぬ」

死ぬまぎわまで云い通して、息をひきとるときも、

「無念じゃな、加賀を皆殺しにせずに逝くのが無念じゃ。義景よ、あとをしかと頼むぞ」

遺言はほかに何もなかった。兵はひかず、あくまで戦えと云いのこして死んだのである。七十九だった。しわの多い槐の肌のように黒ずんだ宗滴の死相は、死ぬことを恐れたからでなくて、加賀攻めの途中で死なねばならぬ不覚さにゆがんでいた。六十年を戦いばかりに使い果した男の戦う途中の死だった。無念なのはよくわかった。宗滴は、この一乗谷に城を築いて朝倉の今日の土台をつくった氏景の子であった。七男だったために、政治にかかわらなかったが、かわりに戦さにばかり出ていた。父孝景の後見役で館へもよく来たそうだが、義景の記憶には、くつろいだ

爺イの姿をみたことがなかった。いつも金ヶ崎か、九頭龍川畔の前線へ出ていた。死ぬ一年ほど前だったろうか。宗滴爺イは、義景をつれて前線へいった。見せたいものがあるといったのだ。朝から気負いたち、義景にはもちろん甲冑を着せている。

あれは、九頭龍川から、北へ浄法寺山へ入った谷奥の、森の中だった。焼けただれた神社の柱や敷居がまだくすぶっていた。うす暗い大木の根に五体の真ッ裸にされた男の死体があった。

「よく見ろ」

宗滴は部下に、うつ伏せにしてあったそれらの死体を一つ一つ順に仰向けにさせた。年の不明な死体は、禪まではぎとられていた。胸にも腹にも首にも突き傷があり、中には眼玉をえぐられ、顔の肉はそぎとられて、しゃれこうべになった一体もあった。地面には血が黒くへばりつき、そこらじゅうの草にまだ糸をひいていた。むごたらしさは、義景の胆を冷やした。

「景恒の部下だ、みんなこんな目にあうのだぞ」

宗滴の眼は細くとじられていた。鞭をもった手が小さきみにふるえていた。

「一揆はこのような殺し方をする。よく見ておけ。戦さは土地と財産をとられて、降参すればそれで済むというものではない。いつまでも朝倉の血をすすりたいけもののような人間がいるのだ。朝倉の一族なら、一人のこらずこのように殺しつくして地に埋めたい怨念を、やつらは燃やしつけている。わしは六十年戦さにばかり出た。だが、こんな人の殺し方をみたのははじめてだ。

義景よ、お前の父は十三歳から、いくどこのような死ぬ目に会うてきたろう。その父が一生をかけ、わしが六十年をかけてさえ、一揆はこのとおり根絶やしに出来ぬ。よくみておけ」

宗滴はそういうと、部下に死体をもとにもどさせて、菰をかぶせるよう命じ、しずかに合掌してから、馬へひきかえした。義景は、息がつまるような嫌悪で、足をふるわせた。血のくさった匂いが、いつまでも鼻にのこった。顔の肉をそぎ落された死体の、ふくれた腹をしていた無気味な姿がいつまでも脳裡にあった。それは館へ帰っても消えなかった。

京都の室町御所へいったのも、宗滴につれられての一日だった。だが、いよいよ上杉と謀って一挙に加賀を攻め亡ぼそうとしたとき、急に病気になった。宗滴の死を待っていたようにして、意外にも義輝からの報であった。本願寺側が和睦を聞き入れたという。義景はほっとした。だが、宗滴の臨終の顔がうかんだ。しかし、根絶やすまで戦えといった爺イの遺言を破ったのである。加賀と和睦を結び、北辺の軍兵をひきあげた。あれから十年たっている。

義景はいま、城山の中腹から、爺イがこちを見ている死出の顔をふっ消すに力がいった。

「爺イのいった通りでござるわ。和睦は一時の仮面であった。一揆はまたぞろ川をわたって南進してくる。爺イ、やっぱり、一揆は朝倉の血を吸わねば生きてゆけぬらしい」

そうつぶやいて、いつもの反問をくりかえしてしまうのである。

へそれほどまでに、一揆を怒らせる根を父や祖父はなぜ犯してしまったのだろう。なぜ門徒をか